

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K18628

研究課題名（和文）児童・生徒の地理・歴史リテラシーを育む「地歴統合型授業」の開発と実証的検討

研究課題名（英文）An empirical study of the processes and effects of social studies lessons which integrate geographical and historical inquiry on students' improvement of their geographical and historical literacy

研究代表者

藤村 宣之（Fujimura, Nobuyuki）

東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・教授

研究者番号：20270861

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、児童・生徒の「地理・歴史リテラシー」（地理的・歴史的事象に関する深い概念的理解と思考プロセスの表現）を高める学習に関して、(1) 現行の社会科教科書の発問の特質、(2) 「地歴統合型授業」のプロセスと効果、(3) 「地歴統合型単元」のプロセスと効果を検討した。その結果、(1) 現行教科書には1割程度、両分野に関連する問いが含まれるがその割合は単元により異なること、(2) 地理的事象と歴史的变化を関連づけた資料の探究は両分野の概念的理解を深めること、(3) 地理的事象と歴史的事象の探究、それらを統合する探究を組織した単元は、地理・歴史リテラシーの向上に一定程度、寄与することなどが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、教育心理学や教科教育学の領域において、地理や歴史に関する子どもの概念的理解の様相やそれらを促進することに寄与する社会科の授業や単元構成、現在の教科書の可能性について明らかにしたことにある。現在および将来の社会生活に寄与するリテラシーの育成方法の解明は国際的に見たこれからの教育の課題であり、本研究は社会科学の領域におけるリテラシーに関して、その育成方法や課題について実証的に検討した点に社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In order to clarify learning processes and contents for enhancing students' geographical and historical literacy, this study examined (1) the types of questions included in social studies textbooks, (2) the processes and effects of lessons which integrate geographical and historical change, and (3) the processes and effects of a unit of lessons which integrates geographical and historical inquiry. The results showed that (1) the social studies textbooks include some (about 10% of the total) types of questions which cover both geographical and historical areas, and the ratio varies depending on the contents, (2) students' inquiry into figures or graphs which relate geographical phenomena and historical change facilitates their deep conceptual understanding of the phenomena, and (3) the unit of lessons mentioned above contributes to some extent to improve students' geographical and historical literacy.

研究分野：教育心理学

キーワード：地理・歴史リテラシー 概念的理解 科学的思考 探究 社会科授業 社会科教科書 知識統合

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

現代社会に生起している問題の本質を理解し、その問題の解決方法を探るには、問題の歴史的背景とそれが生起する空間的・地理的条件をあわせて考えることが必要であると考えられる。社会科学的事象には多様な要因が関連し、概念的理解の過程には複雑な様相が想定されるが、歴史的概念 (Leinhardt & Ravi, 2013 など)、経済学的概念 (藤村, 2002 など) に比べて、日常世界との関連の強い地理学的概念の理解過程に検討の余地が残されている。また、地理教育の分野では、現代の社会変化との関連性の検討も求められている (荒井, 2014; 林, 2008 など)。以上のことから、歴史的变化と関連づけながら地理的事象の概念的理解を深化させていくプロセスの解明や、歴史的事象を地理的条件と関連づけながら概念的理解を深化させていくプロセスの解明が、歴史的事象や地理的事象に関する思考や深い概念的理解を向上させるための課題となると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究では、小学校から高校に至る児童・生徒の「地理・歴史リテラシー」(現在および未来の社会生活に生きる、地理的・歴史的事象に関する深い概念的理解と思考プロセスの表現)を高めるための学習内容や学習方法を明らかにするために、(1) 現行の社会科教科書の発問の特質、(2) 「地歴統合型授業」(地理的分野の授業で、地理的事象の探究に加えて時間的変化も考察させる授業と、歴史的分野の授業で、歴史的事象の探究に加えて空間的要因も考察させる授業)のプロセスと効果の分析、(3) (2)を継続的に組織して開発した「地歴統合型単元」のプロセスと効果について、教育心理学と教科教育学の観点から実証的に検討することを目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 中学校社会科教科書の問い(発問)に関する心理学的検討

平成 29 年度告示の学習指導要領に対応した中学校社会科教科書のうち歴史的分野、地理的分野について、「令和 3 年度使用教科書の需要数集計結果」の上位 3 社の教科書を対象とした。本研究では、「教科書が生徒に何らかの疑問を提示したり、思考や認知的な操作を求めたりするもの」を問いとみなすこととした。そのため、「なぜ集落の周りに柵や濠が作られたのかな」といった、本文の脇から架空の生徒のキャラクターが問いかけるものや、本文の見出しとして「学習課題 平安時代の貴族の文化は、どのような特色を持っていたのでしょうか。」のように示されるものも問いとみなした。歴史的分野の教科書に記載されている問いのうち、空間的な関係が問いに含まれると考えられるものを、空間的な要素のある問いとして集計した。また、地理的分野の教科書に記載されている問いのうち、時系列的な関係が問いに含まれると考えられるものを、時系列的な要素のある問いとして集計した。加えて、「なぜ～」や「理由を考えよう」などの因果関係を問う文言で構成させる問いや、「背景を説明しよう」などの文言で構成される問いについて、因果や背景を問う問いとして集計した。

#### (2) 「地理・歴史統合型授業」のプロセスと効果の心理学的検討

地理的分野の授業で地理的事象の探究に加えて時間的変化も考察させる授業

中学生の社会科学的概念に関する理解を深めることを目的として、公立中学校 2 年生の社会科地理的分野において、第一次産業(農業)の(a)就業者が減少した理由と(b)今後の発展方法をテーマに、(a)に関連する 4 種類の資料に関する個別探究(資料の選択は各生徒の判断に任されており、複数の資料を選択することも可能)、それに依拠したクラス全体での協同探究、(b)に関する個別探究によって構成される授業(参加生徒: 33 名)が実施された。(a)の 4 資料のうち、2 種類は地理的事象を扱った資料(ある地区を事例に高齢化に伴う農業問題を紹介した新聞記事、3 種類の農産物について国産品と輸入品の価格の違いを示した表)であり、2 種類は歴史的变化(時系列的变化)も検討した資料(同一地域の 2 時点の土地利用図、刈取・脱穀の所要時間の変化を 4 時点で示した棒グラフ)であった。(a)(b)の非定型課題(多様な考えが可能な課題)に関する生徒のワークシートの記述内容と、協同探究過程での教師・生徒の発話内容を分析した。

歴史的分野の授業で歴史的事象の探究に加えて空間的要因も考察させる授業

公立中学校 2 年生 3 クラス計 60 名を対象として歴史的分野の授業が実施された。その際、同一内容(第一次世界大戦後の世界)を対象とする 2 クラスの授業に関して、地図の提示方法(A 群: 発問に合わせて地図を提示, B 群: 授業開始時から地図を提示)に差異が設けられた。分析については授業者が実施している「単元学習シート」の記述内容を対象とした。本単元の単元課題は「世界大戦を経験した人類は何を得たのか」という課題であり、各生徒が学習内容や既有知識を関連づけながら多様に解答することが可能な課題(非定型課題)であった。

#### (3) 「地理・歴史統合型単元」のプロセスと効果の心理学的検討

授業(単元)の概要

私立中学校 2 年生を対象として「関東地方」の単元が全 4 時間で構成された。「関東地方」では「人口集中・増加」を中心的な学習課題とし、他地方との関係から空間的・地理的条件(第 2 時)を、人口流入の様子の変化やその原因から歴史的背景(第 3 時)を考察させ、その両者を関



的事象のみ探究群：13名）に区分して各生徒の記述内容を分析した。その結果，(a)に関する個別探究では，因果関係の説明に関して，二段階以上の系列化（例：「機械化で手間や時間が減少し，少ない人でできるから」，「高齢化で農作業もできなくなり，後継者もないから」）を示した生徒の割合に群間で有意な差はみられなかった（前者：60%，後者：61%）一方，農業以外の産業との関連への言及（例：「農地が宅地や工業用地に転用されて減っているから」）を行った生徒の割合は前者（45%）が後者（8%）に比べて有意に高かった（直接確率計算法（両側検定）， $p < .05$ ）。さらに上記の区分で，(b)に関する記述内容の分析を行った結果，農業を今後，発展させる方法について，系列的・並列的に複数の要因を関連づけた説明（例：「小学校の課外授業で（伝統的に栽培されてきた）綿花の栽培に取り組み，第一次産業のことを知ってもらおう」，「耕作放棄地に）農地を広げて機械を多く使うことで，人が少なくなっても短時間で多くとれる」）を行う生徒の割合が前者（75%）が後者（31%）より有意に高かった（同， $p < .05$ ）。

以上の分析から，農業就業者の減少理由について，歴史的変化を探究した生徒と地理的事象のみを探究した生徒では，因果関係の説明の深化（系列化）の比率に差はみられなかったが，前者は後者に比べて他の産業との関連に言及する割合が高く，また協同探究後に，今後の農業の方向性について，複数の要因を関連づけて説明する割合が高いことが示された。因果関係の説明の深化に関して，後者の生徒の多くは，新聞記事の内容を要約する形で因果の系列を示していたのに対し，前者の生徒は，資料にみられる時系列的変化と農業就業者の減少とをつなぐ媒介要因を自発的に推理している場合が多く，系列化の質が異なることが推測される。時系列的変化どうしを生徒が結びつけようとするところに，新たな要因の探索，発見，統合の可能性が生まれることが推察される。

**発話分析** 協同探究過程では，例えば，ある資料について「農作業の機械化が進んで第一次産業に就く人が減った」とした生徒の発話に対し，教師が「元々行っていた人はどうしているのかな」と尋ねることで，他の生徒から「機械のレンタル」「加工」など他業種への転換や他資料との関連を示唆する発話が導かれており，協同探究過程が個人の地理的事象に関する概念的理解の深化を媒介している可能性が示唆された。

**総合的考察** 本研究では，複数の資料から生徒が自発的に選択した資料にもとづいて，探究過程や理解の深化過程の対比を行うことで，地理的事象について歴史的変化と関連づけて考察を行うことが二段階の因果関係の説明や複数の要因を関連づけた説明などの概念的理解の深まりにつながることを示唆された。より厳密な検討を行うには，生徒の既知知識や学習観等と資料選択との関連性の検討や，資料の内容や利用条件を統制した複数の授業による検証が必要になると考えられる。

#### 歴史的分野の授業で歴史的事象の探究に加えて空間的要因も考察させる授業

単元課題への解答に対して，授業内容と実際の生徒の記述からカテゴリー化を行った。「領土（植民地）の増減」「経済力」など計7つのカテゴリーが見いだされ，それぞれ記述した人数を集計した。その結果，単元後においてA群はB群と比べて「領土（植民地）の増減」を有意に多く記述していた（A群 75%，B群 21%）。単元課題に対する記述内容の分析から，発問を提示する際，生徒に地図へ着目するよう促すことは，多様な解答が可能な非定型課題において歴史的事象の地理的側面に言及する可能性を高めることが示唆された。「地図」を歴史的事象を探究するための対象であると明示することは地理的要素（領土の増減）への認知を活性化させ，歴史的事象を地理的に探究することにつながることを推察される。

#### (3) 「地理・歴史統合型単元」のプロセスと効果の心理学的検討

##### 「地理・歴史リテラシー」の向上に対する授業の効果

「外国人労働者」課題において，Table 3にみられるように，事前課題から事後課題にかけて水準1の人数が有意に増加したことから地理的分野の学習としての効果はみられた一方で，「地理・歴史リテラシー」の向上（概念的理解の深化と思考プロセスの表現の精緻化），「水準2の人数の増加」に関しては限定的であったとみられる。他方で，「耕作放棄地」課題において地理的条件と歴史的背景の両者を関連づけた記述（水準2）が多くの生徒にみられた。「耕作放棄地」課題は生徒の居住地でも生じている問題でもあり，他地方の学習で過疎を既習であったことから，地理的分野の農業面での人口流出の具体的な影響を生徒たちが想起しやすく，本単元で目標としたような歴史的背景との関連づけが促進されたと考えられる。逆に「外国人労働者」課題は，高度経済成長期における労働力人口の流出とその欠員補充のための外国人労働者の増加という歴史的背景を生徒が内的表象として形成することが難しい遠転移の課題となっていたとみられる。遠転移を促進するためには，様々な単元・題材においては，空間的・地理的条件と歴史的背景を探究する場面を継続的に組織し，「地理と歴史は関連している」という認知的枠組みを漸進的に形成していく必要があることが推察される。

Table 3 事前事後の評価課題における人数分布

事前	事後 「外国人労働者」課題				事後	「耕作放棄地」課題			
	水準0	水準1	水準2	計		水準0	水準1	水準2	計
水準0	2	6	1	9	0	6	12	18	
水準1	0	5	2	7					
水準2	0	1	1	2					
計	2	12	4	18					
群内比較	Bhaskar 検定				群内比較	$\chi^2$ 検定			
検定結果	$p < .01$				検定結果	$p < .01$			
下位検定	①→②				下位検定	①	①	( , )	
検定結果	$p < .01$				検定結果	①, ②		<i>n.s.</i>	
									$p < .05$

### 授業過程と「地理・歴史リテラシー」の向上の関連

授業時のワークシートにおいて、社会的事象（首都圏への人口や産業の集中）の空間的・地理的条件と歴史的背景のどちらの内容に対しても自身の既有知識と関連づけ、自分の言葉で言い換えるような意味づけを行って思考プロセスを表現した生徒（思考表現群）は、他者の考えの模倣や資料の情報の再生にとどまる生徒（資料再生群）に比べて、その後の授業過程において空間的・地理的条件と歴史的背景の両側面から社会的事象の因果関係に着目し説明できるようになることが示唆された（Table 4）。

他方で、両側面から説明を行っていた生徒でも、「外国人労働者」課題に対しては同様に記述ができない生徒もみられることから、別文脈での課題解決にも転移可能な概念的理解の深まりを多くの生徒に達成させることに向けた授業の改善の必要性も推察される。

#### 総合的考察

本研究で構成した「地理・歴史統合型単元」による継続的授業により、授業で対象とした学習内容やそれと領域が近いと考えられる課題に対しては地理的事象に関する概念的理解の深まりに効果がみられたものの、遠転移の効果まではみられなかった。本研究で向上がみられた「地理・歴史リテラシー」が長期的な認知的枠組みとして維持されるのかどうかについて検討するには遅延課題の実施や年間を通じた縦断的実践による検討が必要であると考えられる。

Table 4 授業場面の課題（第4時 展開問題）と評価課題における各群の水準別人数分布

群	第4時 展開問題			「外国人労働者」課題			「耕作放棄地」課題		
	思考表現群	資料再生群	計	思考表現群	資料再生群	計	思考表現群	資料再生群	計
水準2	6	0	6	2	2	4	5	7	12
水準1	1	10	11	5	7	12	2	4	6
水準0	0	1	1	0	2	2	0	0	0
計	7	11	18	7	11	18	7	11	18
群間比較	Fisherの直接確率計算法（両側検定）								
検定結果	$p < .01$			<i>n.s.</i>			<i>n.s.</i>		
下位検定	( , )								
検定結果	$p < .01$			<i>n.s.</i>			<i>n.s.</i>		

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鈴木豪・石橋優美・藤村宣之	4. 巻 73
2. 論文標題 中学校社会科教科書における問いの種類分析 地理的要素・歴史的要素がある問いと因果・背景を問う問いに着目して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 群馬大学共同教育学部紀要（人文・社会科学編）	6. 最初と最後の頁 191-198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 青柳尚朗・小池勇也・藤村宣之
2. 発表標題 児童・生徒の地理・歴史リテラシーを育成する授業のプロセスと効果に関する研究 中学校歴史的分野「第一次世界大戦」を題材として
3. 学会等名 日本教育心理学会第66回総会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 藤村宣之・青柳尚朗
2. 発表標題 中学校社会科授業を通じた生徒の概念的理解の深化プロセス 地理的事象と歴史的变化を関連づけた探究型授業を通じて
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青柳尚朗・佐々木 暢・石橋優美・鈴木 豪・藤村宣之
2. 発表標題 生徒の地理的思考を育む地歴統合型単元の開発と実証的検討 中学校地理的分野「関東地方」を題材として
3. 学会等名 日本社会科教育学会第70回全国研究大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	石橋 優美  (Ishibashi Yuumi)  (60804797)	埼玉学園大学・人間学部・講師   (32421)	
研究 分担者	鈴木 豪  (Suzuki Go)  (40802905)	群馬大学・大学院教育学研究科・准教授   (12301)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	青柳 尚朗  (Aoyagi Yoshiaki)	東京大学・大学院教育学研究科・大学院生   (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------